

木曾義仲

平安時代の終わり、
貴族社会から武家社会への変革期に活躍した武将・木曾義仲は、
嵐山町鎌形あるいは大蔵に生まれたといわれています。

義仲の生地嵐山町

京都にあつて権力を欲しのままにしてきた平家でしたが、一一八三(寿永二年)源氏の進攻によって都落ちしていきます。

その時の源氏の中心的な武将が木曾義仲でした。義仲は一一五四(久寿元年)、現在の嵐山町で生まれたと言われ、義仲に係る伝承や伝承地が町内に多く残されています。

義仲の父は源氏の棟梁・源為義の次男、源義賢で母は小枝御前です。

義賢は嵐山町の大蔵に館を構えて住み、そのころ義仲は駒王丸という幼名で呼ばれていました。

義仲が生まれたのもこの大蔵館に近い鎌形の地内と伝えられています。

源氏の氏神としてまつられる鎌形八幡神社や、ここにある伝木曾義仲産湯の清水などははじめ、町内にある多くのものが「義仲誕生の地」を物語っています。



1 大蔵館跡／県指定史跡
平安時代の末期、1153(仁平3)年頃、源義賢が河越重隆の養子となって上野国(群馬県)多胡から移り住んだと伝えられています。
2 大蔵神社
大蔵神社の森は周囲よりも高くなっており、今でも高い土塁に取り囲まれています。義賢の屋敷はこのあたりにあったと考えられています。



■木曾義仲史跡マップ
嵐山町は、歴史と自然が豊かな町です。町内には、特に木曾義仲と畠山重忠ゆかりの史跡が多くあります。嵐山町を散策すると、中世の歴史が自然に楽しめるのではないのでしょうか。

- 1 伝義仲産湯の清水／町指定史跡
鎌形八幡神社境内にあります。木曾義仲は、父義賢が大蔵館に移り住んだ仁平年間に鎌形の館で生まれたと伝えられます。鎌形にはかつて七清水と呼ばれる湧き水があり、その清水を汲んで産湯にしたといわれています。この清水は、七清水の一つに数えられています。
- 2 伝山吹姫の墓
山吹姫の墓と伝えられますが戦国期以降に造られたものです。
- 3 班溪寺
鎌形に所在し、木曾義仲の愛妻山吹姫の菩提寺とも、開基ともいわれています。山吹姫の戒名は「威徳院殿 班溪 妙虎大姉」と言いますが、江戸時代に追善した贈り名と考えられます。境内には、山吹姫の墓と伝えられる供養塔があり、毎年3月には義仲を偲んで、慰霊祭が行われています。



義仲の生地 嵐山町

平家追討を果たし、栄光の朝日将軍から悲劇の武将へ。義仲ゆかりの地を訪ねる。

大蔵の戦い

木曾義仲の父源義賢は、近衛天皇が東宮（皇太子）のとき、その警護役である帯刀の長官だったことから「帯刀先生」と呼ばれました。

一一五三（仁平三）年頃、上野国（群馬県）多胡から武蔵国（埼玉県）大蔵へと迎え入れられ、大蔵館を構えたと言われています。

そして一一五五（久寿二）年、義賢は嵐山町大蔵の地で起こった「大蔵の戦い」で非業の最期をとげることになります。

義賢の兄義朝の長男である悪源太義平は、この地方に勢力を伸ばすために大蔵館を攻め、義賢と一族の大部分が討ち死にしました。

しかし幼い駒王丸（後の義仲）は危うい所で命を助けられ、その後の時代に大きな影響を与えることとなります。



1 伝木曾殿館跡
鎌形にあります。昔からこの地は木曾殿（きそどん）と呼ばれ、駒王丸はここで生まれ、育てられていたと伝えられる場所です。館跡は台地上にありますが、崖の中腹には清水があり、木曾殿清水と呼ばれています。

■斎藤別当実盛像
（熊谷市〔旧大里郡妻沼町〕 歓喜院提供）

駒王丸木曾へ向う

駒王丸は、大蔵の戦いで父源義賢が討たれたとき、わずか二歳でした。義賢を討ちとった悪源太義平は「駒王丸を見つけて殺してしまえ」と、家来の畠山重能に命じ鎌倉へと発つていきました。

その後、駒王丸は鎌形の屋敷で捕えられたといわれていますが、重能と斎藤別当実盛とのからいで、母小枝御前と共に命を助けられます。

実盛は駒王丸を七日間かくまったものの、東国には鎌倉の家人が多く危険なため、山深い信濃国（長野県）木曾の中原兼遠に養育を頼みました。

こうして幼い駒王丸は、やがて自らの姓となる木曾の地へと向ったのです。

一一五三（仁平三）年から一一五五（久寿二）年までのわずか二年余りでしたが、源義賢は現在の嵐山町に住み、この地で生涯を閉じました。

義賢の墓と伝えられる五輪塔が大蔵館の近くの新藤氏宅内に所在しているのをはじめ、多くの伝承が嵐山町と近隣に残されているのはそのためです。

その一例として、義賢にちなんで、ときがわ町〔旧都幾川村〕萩日吉神社において四年に一度流鏝馬が行われています。

この流鏝馬は、義賢の遺臣といわれるときがわ町〔旧都幾川村〕の馬場・市川・荻窪家と、小川町大塚の加藤・横川・伊藤・小林家が代々執り行っています。

また、鎌形八幡神社の競馬も、この七氏によって奉納されています。

その他に、群馬県吉井町多胡には義賢館跡と伝えられる場所があり、東京都世田谷区大蔵にも義賢の墓と言われる供養塔があります。



■源義賢の墓／県指定史跡
大蔵の新藤正則氏宅内に所在しています。五輪塔は火災にあったためか変色していますが、埼玉県内では最古の部類に属する優品です。義仲の父、源義賢の墓と伝えられています。



1 鞍・籠
（鎌形八幡神社蔵・埼玉県立歴史と民俗の博物館提供）
鎌形八幡神社の流鏝馬を伝える遺品として購れの舞台で馬を飾った鞍や籠がのこされています。

2 鎌形八幡神社の流鏝馬
（鎌藤惣次郎氏蔵・埼玉県立歴史と民俗の博物館提供）
流鏝馬は大正の頃まで行われており、昭和になってからは競馬に変更となりました。この競馬は、ときがわ町萩日吉神社に流鏝馬を奉納する七氏によって執り行われました。義賢の遺臣といわれる人々が縁故の土地で伝統の祭りを守り伝えていたことがわかります。



3 萩日吉神社の流鏝馬
／埼玉県指定民俗文化財（ときがわ町教育委員会提供）
神社に伝わる『木曾家引略記』という文書によれば、義仲の遺児義次郎が家臣であった馬場氏の姓にあらため、馬場義綱と名乗ります。そしてかつての家来六氏をたよって明覚郷（ときがわ町明覚）に住んだといわれています。流鏝馬の神事はこの七氏が奉納し、現在まで継承されています。

4 萩日吉神社
ときがわ町西平にあります。社伝によれば、蘇我稲目が欽明天皇6年に創建したのが始まりといわれています。鎌倉時代には、慈光寺一山鎮護の神社となり、源頼朝や政子からも手厚く保護されました。うっそうとした杉の大木に覆われた境内は神社の歴史の重みを感じさせるたたずまいです。



義賢の伝承



義仲の生涯

源平の激しい戦いの中で、三二年の短い生涯を送った木曾義仲。その波瀾に満ちた生涯を知ることによって、日本における中世のあけぼのをはっきりと理解することができるでしょう。

波瀾に満ちた生涯

源氏の正しい血を引く駒王丸を、中原兼遠は木曾で大切に育てました。

駒王丸は武術にいそしみ、十三歳の春に元服して木曾次郎義仲と名乗ることになります。

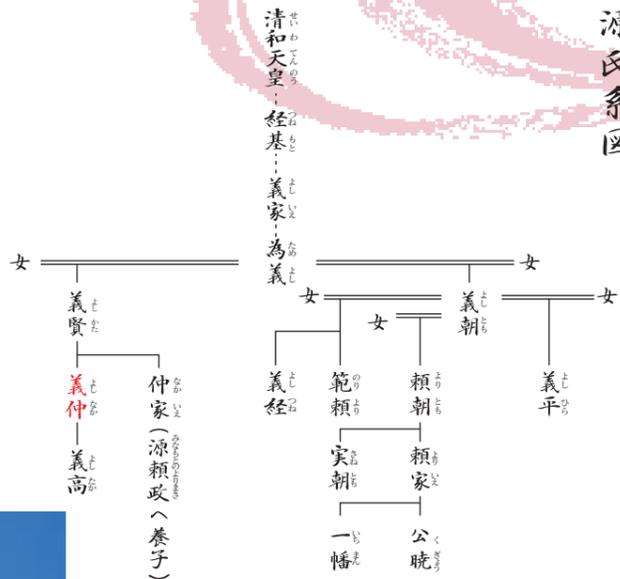
そして一一八〇(治承四年)、義仲は木曾で平家追討の兵を挙げました。

それを皮切りに、一一八一(養和元年)に信濃国(長野県)横田河原の戦いで大勝、一一八三(寿永二年)には越中国(富山県)倶利伽羅峠の戦い、越前国(石川県)篠原の戦いで平家の大軍に連勝し、京都から平家を追い出します。

京都に上ると朝廷から朝日將軍の称号を賜り、征夷大將軍にも任じられるなど、武將として最高の榮譽を勝ち得たのです。

しかし、宇治・瀬田(京都・近江)の戦いで源範頼・義経軍に破れ、近江国(滋賀県)粟津において非業の最期をとげ、三十一歳の短くも激しい生涯を終えました。

源氏系図



木曾義仲年表

西暦	年号	月	出来事
一一五三	仁平三		源義賢が川越重隆の養子となって大蔵館に移り住む。
一一五五	久寿二	八	義仲(駒王丸)生まれる。
一一五六	保元元	七	義仲の父義賢、武藏国比企郡大蔵館で甥の源義平に討たれる。義仲(駒王丸)木曾に逃れ中原兼遠に養育される。
一一五九	平治元	十二	保元の乱始まる。
一一六〇	永治元		平治の乱始まる。
一一六六	仁安元		源義朝殺され、頼朝伊豆に流される。駒王丸元服。木曾次郎義仲と名乗る。

1 旗竿八幡宮

(木曾町(旧日義村)提供)
木曾義仲館跡の西どなりに位置しています。義仲が旗竿揚げをしたときに、この境内で戦勝祈願をしたことから旗竿八幡宮と呼ばれています。拝殿脇には樹齢千年といわれるケヤキの巨木があり、遠い歴史を偲ばせています。

2 木曾義仲公墓所

(トキワ印刷(株)提供)
長野県木曾郡木曾町(旧日義村)德音寺にあります。右には母小枝御前と今井四郎、左には愛妻巴御前と樋口兼光の墓が並んでいます。

3 木曾義仲騎馬像

(護国八幡宮提供)
富山県小矢部市護国八幡宮(増生八幡宮)にあります。騎馬にまたがり、手綱を引く義仲の勇ましい姿をあらわした銅像です。



4 義仲と覚明図 (富山県小矢部市護国八幡宮提供)

3

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

4

一一八〇	治承四	
一一八一	養和元	
一一八二	寿永元	
一一八三	寿永二	
一一八四	寿永三	(元暦元)
一一八五	文治元	

源頼政、以仁王から平家追討の令旨を得て、諸国の源氏に伝える。
以仁王、源頼政、義仲の兄仲家ら敗死。
源頼朝伊豆にて拳兵。
木曾義仲拳兵。
義仲、上野国に入り十二月信濃に戻る。
平家方の城氏越後より信濃へ攻め入る。義仲これを横田河原(長野市)に迎え撃つて大勝する。
義仲追討のため平経正、通盛軍北陸道へ進発する。
平家軍 義仲の軍と越前水津に戦い、敗退して京都へ退く。
この年凶作。義仲、頼朝、平氏の三勢力対峙する。
義仲、頼朝と不和となり、義仲、長子義高を人質として送り和解する。
義仲、兵を進めて越中般若野に平家軍を破る。
越中砺波山の東に陣をとり、夜に入って平維盛の大軍を大いに破る。
〔玉葉〕ほか
さらに平家軍を追って加賀篠原に破る。義仲の武將手塚光盛、斎藤実盛を討つ。
義仲、越前の国府に入り覚明に延暦寺へ牒状を書かせ僧徒を誘う。延暦寺、義仲の求めに応ずる。
義仲、京都に迫る。平家、安徳天皇を奉じ京都を逃れる。
義仲、行家、京都へ入り後白河法皇に拝謁。平家追討の院宣を受ける。
義仲従五位下左馬頭兼越後守に、行家は従五位下備後守に任せらる。
朝日將軍の称号を賜わる。
義仲、伊予守に任じられる。
義仲、平氏追討のため播磨へ向う。
義仲軍、備中水島の戦いで平家軍に敗れる。
義仲、法住寺殿を攻め法皇の近臣らを解官する。
義仲、後白河法皇より征夷大將軍に任じられる。
源範頼・義経の軍、勢多・宇治で義仲軍を破り京都へ入る。
義仲、近江の粟津に戦死する。今井兼平も自害する。
義仲の長子義高、鎌倉を脱出するが四月二十七日武蔵国入間河原で討たれる。(吾妻鏡)
源頼朝、木曾義仲の妹宮菊を鎌倉に召し、美濃国遠山庄内の一村をあてがい、信濃の御家人小諸太郎らに扶持させる。



木曾義仲



■許六の碑
(トキワ印刷(株)提供)
木曾町〔旧日義村〕巴淵にある句碑で「山吹も巴もいでて田うへ哉」と刻まれています。
森川許六は、江戸時代前期に活躍した俳人で、師芭蕉と同じく義仲を愛した句を詠んでいます。



■義仲館
(木曾町〔旧日義村〕提供)
JR中央西線宮ノ越駅から徒歩約10分の場所にあります。
平成4年、ふるさと創生事業により作られた義仲のガイダンス施設です。
義仲の関連資料を示しながら義仲の生涯を展示し、木曾町〔旧日義村〕における関連史跡を案内しています。
同館の裏には、義仲の菩提寺である徳音寺があります。

義仲旗挙げ
長野県木曾郡木曾町 (旧日義村)

木曾へ逃がされた駒王丸は、中原兼遠の元で生まれ成長していきます。
十三歳を迎えた春に元服し、名を木曾次郎義仲と改め、新しい館(現日義村宮ノ越)に移りました。
母小枝御前は、その二年後の秋に病で亡くなります。
二十六歳になった二一八〇(治承四年)年、以仁王から平家追討の令旨を得ると、義仲はついに挙兵します。
宮ノ原の館に集まった兵は約一千騎でした。旗拳八幡宮で戦勝祈願をした義仲は、木曾から佐久へ入り信濃各地の武将を集めて兵力を増強していきます。
そして横田河原の合戦において、約六万の越後の城太郎助職の軍に大勝すると、義仲の名は全国へと鳴り響いたのです。

■義仲の旗揚げイメージイラスト
(画 田畑修)



■林昌寺
(トキワ印刷(株)提供)
義仲を育てた中原兼遠は義仲が挙兵した後に仏門に入り、この寺を建立したと伝えています。



■徳音寺
(トキワ印刷(株)提供)
義仲館の奥の山際に所在しています。
義仲が母小枝御前を葬った寺で、以後一族の菩提寺としました。
『徳恩寺縁起』によると、大夫房寛明がもともと山吹山のふもとにあった柏原寺を現在の場所に移し、1184(寿永3)年、日照山徳音寺と改称したと伝えています。
境内の墓地には、義仲公墓所があります。



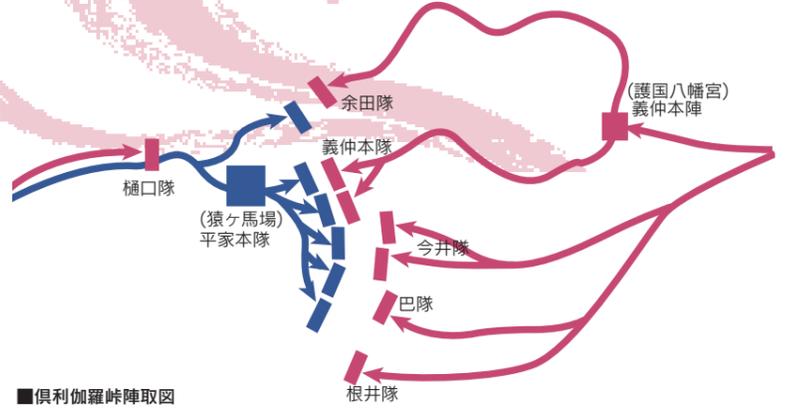
■義仲生涯マップ①



倶利伽羅峠の戦い

横田河原の戦いで勝利を得た義仲は、北路から京都をめざして攻め上りました。そして一一八三寿永二年五月、富山県と石川県境にある倶利伽羅峠において、一〇万の平家軍と激戦を繰り広げます。義仲の軍の、二倍にもあたる兵力でした。ここで義仲は、軍略家としての才能を発揮することになります。「源平盛衰記」によると大軍を破るため、牛四・五百頭を集めその角に松明を結びつけて、夜になると松明に火をつけた牛を一斉に平家軍の中に追い込んだのです。驚いた平家軍は刀や弓を捨てて敗走し、次々に倶利伽羅峠の谷の中へ落ちていきました。これが「火牛の計」として戦史に名を残した、倶利伽羅峠の戦いです。

- 1 横田河原古戦場跡
長野市の郊外、千曲川沿いの横田地区。二千騎の義仲軍が、六万余騎の越後城氏が率いる平家軍を打ち破ったことで有名な横田河原の戦いの跡です。
- 2 木曾義仲願文
(富山県小矢部市護国八幡宮提供)
倶利伽羅峠の戦いを前に義仲は、戦勝祈願のための願文を軍師覚明に起草させ埴生八幡宮へ奉納しました。
- 3 倶利伽羅峠合戦の図
(石川県河北郡津幡町倶利伽羅神社蔵・石川県立美術館提供)
牛の角に松明を結び付け平家の陣中へ突入させた火牛の戦法を描いています。



篠原の戦い

倶利伽羅峠の戦いで戦史に残る勝利をおさめた義仲は、勢いに乗って平家軍を追走していきます。

越前国(石川県)篠原において、平維盛が率いる軍と戦い再び勝利を収めました。この篠原の戦いでは、逃げる平家の中にあって一騎踏みとどまり、手塚太郎光盛と戦い討ち死にした武将がいました。

その武将こそが、かつて駒王丸と呼ばれた義仲を木曾へ逃がしてくれた命の恩人、斎藤別当実盛だったのです。

白髪を黒く染めていたためすぐに実盛とわかりませんでした。髪を洗うと白髪が現れました。

義仲は、命の恩人を敵として討たねばならない戦乱の無情を嘆いたと伝えられています。



■義仲進軍ルートマップ



■義仲生涯マップ②



4



5

4 篠原古戦場跡と実盛塚
(加賀市提供)
幼い駒王丸を大蔵の戦いの後、木曾へ逃した命の恩人である斎藤実盛は、篠原の戦いで討ち死にしました。加賀市の篠原古戦場跡には、実盛の首を洗ったという首洗池と実盛塚があります。



6

5 倶利伽羅峠
(小矢部市提供)
富山県小矢部市と石川県河北郡津幡町の境にある峠です。現在は、倶利伽羅県定公園の源平ラインとして整備されています。義仲が、火牛の計をもって平家の大軍を壊滅させた、倶利伽羅峠の戦いの地として有名です。



7

6 芭蕉句碑
(小矢部市提供)
小矢部市の倶利伽羅峠古戦場跡に建てられた句碑です。松尾芭蕉は義仲を偲び「義仲の寝覚めの山か月悲し」と詠みました。

7 護国八幡宮(埴生八幡宮)
(小矢部市提供)
倶利伽羅峠のある砥波山のふもとにあり、義仲が戦勝祈願をしたと伝えられています。以来、弓矢の神として戦国時代から江戸時代を通じて多くの武将の信仰を集めました。



3

朝日将軍

せまり来る義仲軍五万の軍勢におびえた平家一門は、幼い安徳天皇を奉じ、皇室の象徴である三種の神器とともに京都を離れ西海へと逃れていきます。

一一八三寿永二年のことでした。間もなく京都に入った義仲は、後白河法皇に拝謁します。平家追討の功績によって朝日将軍の称号を贈られ、改めて京都の護りを命じられるなど、義仲にとつて最も輝かしい時を迎えたのです。

しかし、義仲の勢いに恐れを抱いた老獯な政治家である後白河法皇はしだいに義仲を遠ざけるようになります。

同じ年の十一月、法皇は軍勢を集めて法住寺にたてこもり、義仲軍との衝突という決定的な対立が起こりました。

翌一一八四(元暦元年)、義仲は武門の最高位である征夷大将軍に任じられますが、すでにその時、法皇から鎌倉の源頼朝に向けて義仲追討の命が出されていたのです。

1 後白河法皇画像

(京都市東山区妙法院蔵・(株)飛鳥園提供)
法皇として朝廷の最高実力者であり、義仲へ征夷大将軍の位を任じますが、同時に頼朝へは義仲追討を命じるなど、武家同志の対立をたくみに陰からあやつった人物です。

2 猫間中納言

『平家物語絵巻』(岡山県岡山市林原美術館蔵)
京都へ入った義仲軍の勢いに警戒心を抱いた後白河法皇は、義仲軍兵士の一部に粗暴な行動があったのをとがめ猫間中納言光隆を使者として義仲に部下の行状の肅正を求めました。

3 義仲生涯マップ③



■木曾義仲の木像
(滋賀県大津市義仲寺提供)



3 京都御所/京都市上京区 (京都市提供)
平家軍を破り京へ入った義仲はここで後白河法皇に謁見し、あらためて平家を討て」と命じられました。

4 義仲寺 (義仲寺提供)
滋賀県大津市に所在し、東海道本線大津駅下車、徒歩15分の場所にあります。
義仲は元暦元年粟津ヶ原で討ち死にしましたが、義仲寺には宝篋印塔の義仲の墓と、巴塚があります。後世、義仲を愛したという松尾芭蕉の墓があることでも知られています。

義仲の最期

義仲追討の命を受けた頼朝は、源範頼・義経を大将とする六万騎の大軍を京都へ派遣します。

一方義仲軍は、西国へ逃れた平家軍と東からせまり来る頼朝の圧力などによって兵力を分散せざるをえず、窮地に追い込まれていました。

今井兼平が八〇〇騎、山田次郎が五〇〇騎を率いて宇治川の瀬田と宇治橋方面を守らせ懸命に戦います。

しかし範頼・義経の大軍をくい止められるはずありません。

こうして、義仲は兼平ら数人を従えて滋賀県粟津ヶ原まで逃れますが、そこで義仲は大軍を防ぎきれず討ち取られてしまいました。

悲劇の武将、木曾義仲三十一歳の無念の最期でした。幼い頃から木曾とともに育った今井兼平も、この時自害したと伝えられています。



5 義仲の最期

『平家物語絵巻』(林原美術館蔵)
今井四郎兼平は主君義仲を逃がしたただ一騎敵軍へ突入しますが、義仲は深田へ馬を乗り入れてしまい身動きがとれなくなってしまったところを敵の矢に射られてしまいます。

6 今井四郎兼平墓

東海道線石山駅近くに位置しています。
子どもの頃から義仲とともに育った今井兼平は、義仲を木曾で育てた中原兼遠の子であり、巴御前の兄にあたります。

義仲が討たれたあとを追って、刀を口にくわえて馬から飛び下り壮絶な最期を遂げたといわれています。 (『平家物語』)

7 巴塚

墓は供養塔。義仲寺に所在します。

8 義仲墓

墓は宝篋印塔。義仲寺に所在します。



義仲

義仲の伝承を訪ねて



1 木曾殿アブキ
(長野市〔鬼無里村〕提供)
長野県長野市（旧上水内郡鬼無里村）にある間口60m、奥行20mの大岩窟です。義仲軍が北陸道へ進軍した際に訪れ、騎馬300騎を休めたと伝えられています。



2 山吹御前首塚
京都市立有済小学校校庭にある供養塔です。



木曾義仲は、源平争乱期において、源氏の一方の旗頭として平家追討に大きな歴史的役割を果たした人物です。

その生涯は波瀾に満ちた短いものでしたが、ゆかりのある各地域に伝承や伝承地が多く残され、個性豊かな一本気な武将として偲ばれ、慕われています。

平成元年、木曾義仲ゆかりの市町村が、相互に交流し結びつきを深めることを目的として、「全国木曾義仲ゆかりの会」が結成されました。

会に加わったのは、木曾義仲生誕の地・埼玉県嵐山町、義仲成育の地であり旗挙げの地でもある長野県木曾町（旧日義村）、俱利伽羅峠の戦いのあった富山県小矢部市（旧日義村）、義仲の重臣大夫房覚明と三六家臣団が義仲の三男義重をかくまった広島県尾道市（旧日向島町）、長野県長野市（旧鬼無里村）、長野県麻績村、長野県信州新町の市町村です。

その後、年一度の持ち回りにより総会を開き、交流を深めています。

木曾

ゆかりの会

- 3 玉泉寺
(信州新町教育委員会提供)
もとは京都にあつて、義仲の祖父源為義が帰依したのに始まり、義仲没後にこの地へ遷されました。長野県信州新町は義仲の重臣仁科氏の領地であり、旭観音菩薩像が安置されています。
- 4 根井行親の墓
(佐久市教育委員会提供)
長野県佐久市には、義仲の参謀役であり最大の協力者であった根井行親一族の館跡と菩提寺正法寺があります。根井行親の墓は正法寺にあります。
- 5 亀森八幡宮
(尾道市〔旧日向島町〕教育委員会提供)
義仲の没後に、重臣であった大夫房覚明は、義仲の三男義重を36人の家臣団で守り、広島県尾道市（旧御調郡日向島町）へ移り住んだといわれています。この八幡宮のほか、木曾明神や三十六苗荒神など、ゆかりの神がまつられ、木曾一族の再起を願ったのだと伝えられています。



■実盛の兜／国重要文化財
(石川県小松市多太神社提供)
実盛が最期の時にかぶっていた兜と伝えられるものです。俳人芭蕉は「むざんやな甲の下のきりぎりす」という句を詠んでいます。また、江戸時代に松平定信が編さんした『集古十種』にも図が収められています。



■実盛首洗池
(加賀市提供)
石川県加賀市篠原古戦場跡にある池です。討ち取られた実盛の首は黒髪でしたが、この池で髪を洗ったところ白髪になったということです。



■火牛の像
(小矢部市提供)
俱利伽羅峠古戦場跡にあります。「火牛の計」を示すものとして作られています。「火牛の計」は、500頭の牛の角に松明を付けて平家軍に夜襲をかけたという戦史に残る有名な戦略ですが、おそらく『源平盛衰記』の作者が、中国の書の火用の術からヒントを得て書いたものでしょう。

